

北方領土におけるエゾシカの生息状況が明らかに

～ここ数年で国後島に定着か？～

ポイント

- ・ 北方領土における過去 33 年間のエゾシカの生息状況を解析。
- ・ 2017 年から毎年、国後島にてエゾシカの直接観察や糞、足跡を確認。
- ・ 貴重な植物が生育している国後島におけるエゾシカの喫緊なモニタリングの必要性を提唱。

概要

北海道大学低温科学研究所の大舘智志助教と国後島のクリリスキー自然保護区事務所のアレクサンドル・キスレイコ所長らの研究グループは、1986 年から 2019 年までの 33 年間を対象に国後島と歯舞群島を中心とする北方領土におけるエゾシカの生息情報を解析しました。

従来、エゾシカの分布地は北海道本島とされ、国後島や歯舞群島からは江戸時代から終戦まで明確なエゾシカの生息記録がありませんでした。終戦後 1970 年～80 年代前半までは、ごく稀に単独の個体が一時的に発見されることはありましたが、恒常的な生息は確認されていませんでした。

国後島にあるクリリスキー自然保護区事務所では 1986 年半ば以降、北方領土におけるエゾシカの情報収集・蓄積してきました。それらを取りまとめた結果、エゾシカの遺骸は 3 年に 1 回ほどの頻度で、国後島と歯舞群島の水晶島（1 回のみ）で発見されていることがわかりました。そして 2017 年からは毎年、国後島において、直接観察や糞、足跡が確認されています。2018 年には 2 頭が同時に目撃されました。このことから国後島において少なくとも数頭のエゾシカが定着していると思われるのですが、今のところ島内での繁殖は確認されていません。また、エゾシカは冬期に流氷の上を歩くか、夏期に海峡を泳いで渡ったと考えられていますが、詳しい分散経路はわかっていません。

北方領土には貴重な植物が生育しています。一方、対岸の知床半島ではエゾシカが急増したことにより植生が破壊されています。仮にエゾシカが国後島で今後も定着して増殖した場合、知床半島のように植生の破壊が懸念されます。世界的にも貴重な自然環境を有している北方領土の自然を保全するためには、政治的思惑を超えたエゾシカのモニタリングと実態調査が望まれます。

なお、本研究結果は、2020 年 4 月 17 日（金）公開の Mammal Study にオンライン掲載されました。



国後島の近布内（ちかっぶない）の海岸で撮影されたメスのエゾシカ（2019 年 4 月 12 日、アンドレイ・ポリッシュケビッチ氏撮影）。

【背景】

これまでエゾシカの分布地は北海道本島とされ、国後島や歯舞群島などの千島列島南部の島々には、江戸時代から終戦まで明確なエゾシカの生息記録がありませんでした。終戦後も 1970 年代から 80 年代前半にごく稀に単独のエゾシカの個体が発見されただけであり、北方領土はエゾシカの恒常的な生息地とは考えられていませんでした。ところが近年になって国後島においてエゾシカの目撃情報が増えてきました。

一方、これらの島々の対岸にある北海道本島の知床半島や道東地域ではエゾシカの生息数が急増したことによって、森林や原生植生の破壊が社会的な問題になっています。国後島と歯舞群島は北海道本島からわずか 7~16km しか離れておらず、北海道本島からこれらの島々にエゾシカが移動することは難しくないと推測されています(写真 1)。そしてこれらの島々は世界自然遺産の知床半島以上に貴重な植物が生育していることがわかっています。その上、面積の狭い閉鎖地域なので、いったんエゾシカが増殖してしまうと貴重な植生に壊滅的なダメージを受ける可能性があります。

以上のような理由から、貴重な自然環境を有する国後島や歯舞群島などの北方領土でエゾシカの分布状況の実態を把握することが重要です。

【研究手法】

2019 年 9 月に日露の専門家交流事業に基づき、北海道大学の館助教を団長とする陸生哺乳類調査団が択捉島と国後島を訪問しました。国後島ではクリルスキー自然保護区事務所を訪問して、陸生哺乳類の聞き込み調査をしたところ、1986 年以降、同保護区事務所が国後島及び歯舞群島におけるエゾシカの情報を収集・蓄積していることがわかりました。これらの情報は未公開だったことから、館助教と自然保護区のキスレイコ所長らは、その情報を取りまとめました。

まず、自然保護区職員及び地元住民や訪問者によって、エゾシカの遺骸、直接観察、糞、足跡の情報を集めました。そして自然保護区の専門家により、科学的に信頼できる情報のみを取り入れて情報をリストアップし解析しました。

【研究成果】

情報をリストアップした結果、エゾシカの遺骸は国後島で 11 頭、歯舞群島の水晶島で 1 頭発見されました。そのうちオスは 1 頭のみで、残りはすべてメスでした。これらの遺骸は海流にのり流れ着いたものなのか、島内で死亡したのかを確定することはできませんでした。2017 年以降になると国後島で新しい糞や足跡が一年を通じて継続的に発見され、姿を直接確認されるようになりました。また、2018 年には 2 頭が同時に直接観察されましたが、これらもすべてメスでした。これらの痕跡や直接観察はほとんどが太平洋側で確認されました(図 1)。

以上のことから、2017 年以降は国後島において少なくとも 2 頭が定着していると推測されますが、これらのエゾシカがどのような経路で移住してきたのかは明らかになっていません。

【今後への期待】

国後島や歯舞群島を含む北方領土は、世界自然遺産である知床半島よりも原生的な自然が保持され、また貴重な植物が生育しているとされています。一方、知床半島や北海道東部では急激に増殖したエゾシカによって貴重な植生や自然環境が破壊されており、社会的な問題にもなっています。

北方領土の島々は北海道本島と比べて狭い面積であり、孤立しています。もしこれらの島々でエゾシカが急激に増殖すると、北海道東部のように植生に壊滅的なダメージを受けることが危惧されます。

これらの貴重な自然環境を後世の子孫に残すためには、日露が政治的思惑を超えて協力し合い、エゾシカのモニタリングと実態調査を行っていく必要があります。

論文情報

論文名 Records of sika deer *Cervus nippon* from the southern Kuril Islands in 1986–2019, with special reference to a continuous record of living deer on Kunashir Island since 2017
(1986-2019年に南クリル諸島におけるニホンジカの記録—2017年以降、国後島における生体の連続記録)

著者名 エフゲイ・コズロフスキー¹, アレクサンドル・キスレイコ¹, 福田知子², 河合久仁子³, アレクセイ・アブラモフ⁴, 大館智志⁵ (¹国後島・クリリスキー自然保護区, ²三重大学, ³東海大学, ⁴ロシア・動物学研究所, ⁵北海道大学低温科学研究所)

雑誌名 Mammal Study (日本哺乳類学会発行の英文国際専門誌)

D O I 10.3106/ms2020-0008

公表日 2020年4月17日(金)(オンライン公開)

お問い合わせ先

北海道大学低温科学研究所 助教 大館智志(おおだちさとし)

T E L 011-706-7474 F A X 011-706-7142 メール ohd@lowtem.hokudai.ac.jp

U R L <https://researchmap.jp/OhdachiSatoshi>

配信元

北海道大学総務企画部広報課(〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目)

T E L 011-706-2610 F A X 011-706-2092 メール kouhou@jimu.hokudai.ac.jp

【参考図】



写真1. 野付半島で国後島を背景に群れるエゾシカ (2018年12月27日, 大館智志撮影)。

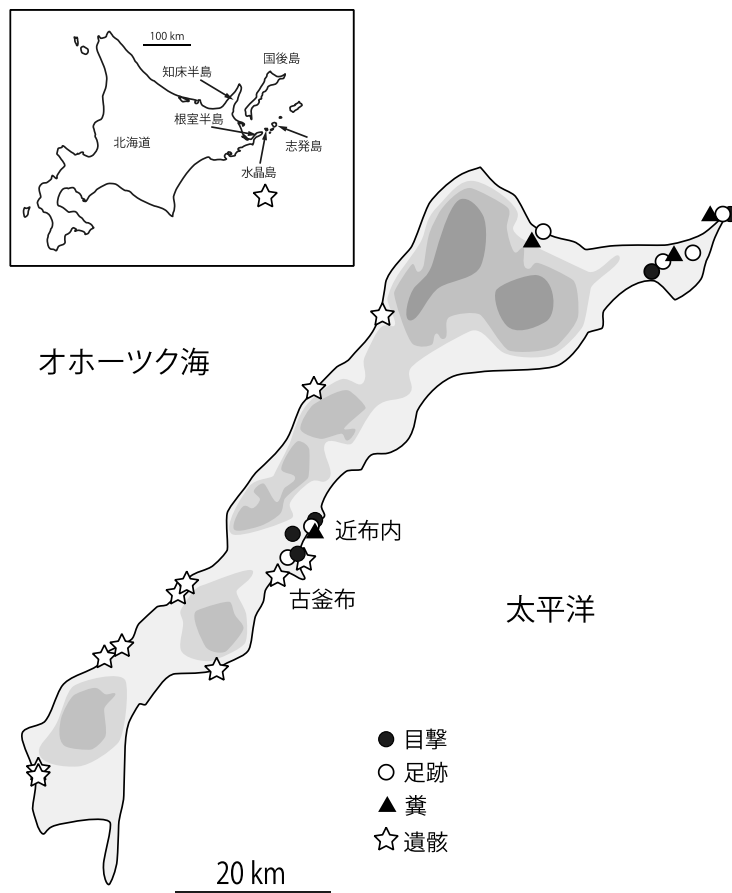


図1. 1986年～2019年に北方領土の国後島と水晶島で確認されたエゾシカの情報